

---

---

## 与世永家文書の周辺

上江洲 均：名城大学国際学部

---

---

与世永という家が、本家の上江洲から分家したのは、西暦 1800 年前後だったと思われる。それは、初代の智昌と妻の年齢からの推定である。智昌は、本家の 8 代智常の 5 男として生まれ、斜め後方の屋敷へ居を構えた。後に結婚して 3 男 4 女をもうけた。数え年 49 歳のとき、地方役人としては最高位の地頭代に任ぜられ、得意の絶頂にあったはずであるが、不幸が続いた。まず、長男が病弱であったが 24 歳で死亡。次女が 13 歳で病死。3 女は他へ嫁いたが 19 歳で病死。4 女は嫁いで 51 歳まで生きたが子がなく、死後に位牌を引き取るようになった。長女だけが子孫を残している。長男の死後、次男の智順が家督を相続したが、首里大屋子まで上り 43 歳で死亡した。彼には子がなかったため、父は 3 男の智慧を兄の跡継ぎにした。現在のユタの論理からはまず考えられないことである。弟が兄を継ぐことは兄弟が重なり合うことであり、しかも嫡子をないがしろにするという、もうひとつのタブーがあるが、その頃の久米島にはそのようなタブーもなく、何の問題もなかったに違いない。智慧も 1834 年に地頭代になり、父と同様に 2 期勤めている。思うに、19 世紀の前半がこの家にとって隆盛期だった。詳しいことは分からないが、おそらく親子とも世の通例にしたがって、首里の地頭家に奉公にのぼったであろう。短くて 3 年、長くて 10 年という事例が多い。ムラには夜学があり、筆算人の子弟に読み書きを教えていた。『規模帳』には、長男だけを筆算人にし、次男以下は百姓にせよとあるが、ほとんど守られず、現在の大学進学のように、兄弟こぞって首里留学よろしく奉公に相勤めたようである。生活費は自弁であったといわれるから、相当の物入りであった。しかし、将来島に帰って指導者になりさえすれば、経済的にもうるおい、地位や名誉もついてくるので計算の合わない話ではなかった。

さて、不幸なことに、3 代智慧にも子がなく、初代の甥の孫から次男の智清を迎えて跡継ぎにした。智清は、明治 4 年から 30 年まで蔵元に奉職し、最後は大田夫地頭という役職にのぼり退職している。明治 20 年前後仲村渠の村掟になった。仲村渠は間切のはずれ、蔵元からは反対の方向にあるので、通知文などが最後に残された。

初代智昌が首里へ奉公にのぼったとすれば、18 世紀末である。首里奉公の収穫といえば、第一に行政の方法を学べることであったらと思うが、もう一つは学問に接する機会が、少なくとも刺激が得られたことではなかろうか。写本をする機会もあったことだろう。綴じ代に月日をメモしている場合がある。それから、真面目に勤め人間関係がうまくいけば、書籍を貸してもらったり、時には譲ってもらうこともあったようである。もちろん、多くは購入であったと思われるが、書籍の入手には相当な努力が払われた痕跡がある。地方役人の退職後は、ほとんどが漢方医学や易学、風水に進み、その方面の史料を集めたようである。与世永の文書は、智昌・智慧父子 2 代にわたる間の収集がほとんどで、それに養子の智清の分が少し加わったと考える。

星霜を経て、家の者は那覇に出たため、明治の中期、この地方ではより早い時期に瓦ぶきに改築した大きな家は、管理人もないまま廃屋になった。それまで 1 度か 2 度曝書をしたことがあったものの、ある年訪ねてみると、廃屋の中に文書が散乱していた。それを掻き集めて祖父智清関係の明治以降のものは多少整理し、直系の孫である従兄に渡し、残りの虫食いや雑多は時節到来まで取って置いたのである。今回これを整理する機会に恵まれ、喜びにたえない次第である。